
ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード11:スーパーモデル体験！？（Vogue）

栗須じょの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニユーヨーク・ラブストーリー / エピソード11：スーパーモデル体験！？（Vogue）

【Nコード】

N9805D

【作者名】

栗須じよの

【あらすじ】

日本に出張中のポールとディーン。ポールがこの国に来たのは、ディーン好きなファッションブランド、タニタ・ショウのファッションショーにヘアメイクとして招かれたため。恋人の仕事を見学しようと、ショーの会場を訪れるディーンだが、そこで彼は出演モデルと間違えられてしまう。誤解はとけたが、デザイナーのタニタ氏はディーンに舞台に立つことを提案。「冗談じゃない！」と嫌がるも、ポールからも頼まれ、だんだん断れない雰囲気。しかし話

が進むにつれ、ディーンは「この仕事をこなせば、ポールにカッコ
イイところを見せてやれるかも」と考える。にわかファッションモ
デルは無事に大役をこなすことができるのか？

（前書き）

こちらは 一話完結のシリーズ物 につき、エピソード第1話からお読み頂けると分かり易いと思います。（本作は前話『第10話』：
ようこそサムライの国へ』の翌日のストーリーとなっています）
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

「誰か有名な日本人の名前を挙げる」と言われたら、みんなは誰を思い浮かべる？

レノンの未亡人、ヨーコ・オノ。マリナーズの外野手、イチロー。ドラマ『ヒーローズ』のマシ・オカ。トライベッカにあるレストランのオーナー、ノブ（フルネームは知らない）。これに加え、おれは服飾デザイナーの名前も何人が挙げることができる。

日本人がデザインするアートは独特の雰囲気があり、その発想の特異性と芸術性は、おれのクローゼットにまで及ぶほど。アメリカ人には思いつかないフォルムと繊細な色合い。今着ているジャケットはショウ・タニタの作品で、これはソーホーで買ったもの。ついさきほど、通りの向こうに彼のショップを発見し、「こんなところにも店舗があるんだな」と思ったのだが、よく考えればそれは当たり前。ここは日本で、ショウジ・タニタは日本人なのだから。

ここは東京のショッピングストリート。ファッション・クレイジーが集う街であることは、立ち並ぶブランドショップを見れば一目瞭然。おなじみのロゴがずらりと揃い、異国にいるということを感ぜさせない佇まい。GAPとスタバとマクドナルド。歩いて家まで帰れそうだ。

こんな風にのんびり街を散策しているのは、昨日でおれの仕事が終わったから。一日だけの現地休暇、明日は帰国の運びとなるこの日、ボーイフレンドのポールは仕事に従事している。彼が日本に招かれたのは、おれの好きな日本人デザイナーのひとり、ショウ・タニタから仕事を依頼されたため。かつて日本に住んでいたポールは、何度か彼の仕事を引き受けたという。本日行われるファッションシ

ヨーで、ヘアメイクを担当するポール。その肩書きは“エグゼクティブ・ヘアメイクアップアーティスト”。素晴らしい響きに、おれが感嘆すると、ポールは「そんなの適当につけたただだよ」と言う。「タニタさんが面白がつてつけてるだけ。“エグゼクティブ・アシスタント”とか“スーパードクター”とか。彼はそういう人なんだ」

ポールはそう謙遜するが、肩書きは肩書き。うちの社内でも“営業課のレーザービーム”とか“企画部のパトリオットミサイル”とかがいるが、そういうのとはワケがちがう。肩書きはアダ名以上に意味のあるもので、“市長”ってタスキと同じくらいクールな威力を放っている。

「もし興味があつたら」と、ポールがくれたファッションショーの招待状。ショー自体に興味はないが、恋人が手がける仕事であれば見てみたい。こんな機会でもなきゃ、足を運ぶこともないイベントに違いない。

大通りの裏手、小さいながらも個性的なショップが立ち並んでいるこのエリアは、マンハッタンに置き換えるとノリータ地区といった雰囲気だ。しばらく辺りを散策し（誓って迷っていたわけじゃないぜ。“散策”だ。）ようやく発見したのは、タイル張りのこじんまりした建物。ここで間違いないだろうかと、地図を確認していると、突然「ちよつと！」という声が辺りに響き渡った。

反射的に声のした方　頭上を見上げると、テラスから身を乗り出すようにして、ひとりの男性がこちらを見ていた。

「ちよつと！　何してんの！　早く楽屋に来なさい！」

え？　これはおれに叫ばれてる言葉なんだろうか？　辺りに人は居ず、該当する人物は他に見あたらないが……？

「なにポケーっとしてんの！　あなたよ！　あなた！」

決定。彼はおれに話しかけてる。英語で話しかけられている時点で、おれへの呼びかけと理解してもよかった。でもどうして？　明らかに彼は知り合いじゃないんだが。

「いそいで！ ショーの開始まで間もないんだから！」

よくわからないが急がなくてはならないらしい。おれは建物に飛び込み、勘を頼りに楽屋を見つけ出す。

モデルとスタッフでごったがえしていたが、すぐにポールを見つけることができた。

「あれっ、デイン？ 何でここに？」

おれを見、不思議そうな顔をするポール。知り合いじゃない奴に『早く来なさい』と言われ、知り合いからは『何でここに？』と訊ねられる。おれの作法に何か間違いがあつたのだろうか。

「よくここに入れたね？ しかもこんなに早く来るなんて」

「早く来なさいって言われたからな。さつき」

「さつき？ 誰に？」

「さあ、誰かな。知らない人だ。シマのシャツを着たヒゲの……」と、説明しかけたところで、その人物が登場した。

「ああ、やつと来たのね。待ってたわ」

シマのシャツを着たヒゲの男。東洋人だが英語は上手い。そしてどうやら、おれを待っていたらしい。

「すぐにフィッターに調整してもらって頂戴。あそこにいる彼がそうだから」

ぽんぽんとおれの肩を叩く彼。どこかで見たような顔だが、やっぱりおれの知人ではない。

去りかけた彼を、ポールが慌て引き止める。

「あの、タニタさん。彼は違うんです」

「ちがう？」タニタさんと呼ばれた男は振り向いた。

「彼はモデルじゃなくて、ぼくのボーイフレンドなんです。今日は一般客で来てるだけで」

タニタさん。そうか、これが“ショウ・タニタ”。服は持つてるが、デザイナーの顔までは覚えていなかった。

タニタさんは両手で頬を押さえ「まー！」と、すっとなきような声を出す。

「あらあら、やだわ。あたしつたら、てつきり……すごい勘違い！」
ゲイの仕草は万国共通。人種や言語が何であれ、仕草によって誰が“そう”で誰が“そうじゃないか”の見分けはつく。

「それじゃあ、まだ本物のモデルは来てないってわけね。せっかく事態が進展したかと思ったのに」そう言い捨てて、彼はブランド服と裸同然のモデル（男だ。残念）の間に消えていった。

「……なんだつたんだ？ 今のは？」

「きみはモデルと間違えられたんだよ。来るはずのモデル。どういうわけか時間になっても現れなくてね。それでちよつと現場が混乱してる。ごめんね、気にしないで」

「時間になっても現れない？ どうして？」

「わからない。連絡がないんだ」

「事故かな？」

「そうじゃないといいけど」

「おれ、何か手伝おうか？」

「ありがと。でも大丈夫。まだ始まらないから、どこかでお茶でもしてきたら？ このあたり、いいカフェがいっぱいあるし」

涼しい顔で周辺情報を述べるポール。おれが大変なときに助けの手を差し伸べてくれた彼に対し、何かしてやりたいという気持ちを持つのは当然のこと。しかし彼は少しもパニックに陥っておらず、またおれの助けも必要としていない。なんだかそれって残念だ。おれだってパートナーの役に立ちたいし、ここで恋人の窮地を救えば、ドラマ的には完璧な流れ。『ああ、デーン。きみってほんとに頼りになる（はあと）』……なんて、馬鹿な冗談を言ってる場合じゃない。ポールが困り果てていないのはもちろんいいことだ。

このままここにいて楽屋裏を眺めていたい気もしたが、それはやっぱり邪魔というものだろう。開演までにはまだ時間がある。ポールが勧める通り、どこかカフェで一服してきたほうがよさそうだ。

楽屋を出ようとしたとき、「ちよつと待って」とポールが声をかけてきた。何だ？ キスの忘れ物か？

おれが“忘れ物”を頼に着地させることをしなかったのは、ポールがタニタさんを伴っていたから。

「さつきは怒鳴りつけてごめんなさい」とタニタ氏。「こつちも緊急事態だったもんだから」

「いえ、お気になさらず」モデルと間違えられるのは日常茶飯事ですから。

「それでねえ、わたし考えたの。頼みがあるの。このままモデルが来なかったら、あなた、代わりを務めてくれないかしら？」

意味を把握しきれず、きょとんとしていると、彼は続けて言った。

「だからね、ショーに出て欲しいの。モデルとして」

「誰が？」

「あなた」

「無理です」

「簡単よ」

「いえ、簡単とかいう話でなく」

「お願い。わたしたち本当に困っているの。人助けと思って」

神に祈りをささげるかのように、両手を胸の前で組む。これが10才の美少女であれば、ほだされたかもしれないが、彼のビジュアルがおれに冷静さを失わせることをさせなかった。

「他のことでよければ何かお手伝いしましょう」

「他のことは足りてるわ」

どつちもかなり頑固だ。おれ陣営のポールはと見ると、ただ黙って話を聞いているだけ。

「最初にあなたを見たとき、モデルと間違えたのは、あなたがあまりにも服のイメージと合っていたからなの。まさにわたしが指定した人物がそこにいた。これはそういうことなのよ」

そういうことって、どういうことだ。

「モデルが不在で窮地に陥ったわたしたちを助けるために、あなたはカミサマから派遣されたのね。まさに救世主！ あなたは天使よ、デイン！」

どんなに持ち上げられたところで、嫌なものは嫌だ。

「ステージの中央まで歩いて行って、それで戻ってくるだけ。大丈夫。簡単よ。ね、ありがとう」

“ありがとう”って何だ。こっちは引き受けると言ってない。

「まっしてくれ！ そんなの困る！」と叫んだときに、彼は居ず。おれはポールに訴える。「冗談じゃない。困るよ。ポール、彼になんとか言ってくれ」

「心配することないよ」とポール。てつきりタニタさんに提訴してくれるのかと思いきや、「これは小規模なキャットショーだから」と続けて言う。「別にテレビ局が来てるわけでもないし、スタッフはみんな優秀だもの。大丈夫、そんなに心配しないで」

「ポール、きみは……もしかしておれの味方じゃないのか？」

「ごめんねディーン、ぼくは仕事で来ているんだ。なにがベストか考えた場合、彼の指示が正しいと思う」

困ったように微笑む恋人。これで唯一の援軍を失った。

「これはローマンの面白パーティーじゃない。ステージに立つなんて絶対に無理だ」

「きみはイザとなったら度胸ある方だと思っな」

「本物のモデルは何してるんだ？ テロにでも巻き込まれてるっていうのか？」

「ね、ディーン。どうしても嫌だっていうなら無理強いはいしないよ。でも考えてみて。これってそんなに難しいことじゃないよ」

“これってそんなに難しいことじゃない”。難しいことじゃないのにパニックに陥って喚いている男。ポールの窮地を救うでもなく、ただ自分の保身を考えている。無理強いはいしないとまで気を遣われ、「じゃ、おれは外のカフェにいるから」……なんて言えるわけがない！

「本当に難しいことじゃない？」

「難しいことだったらきみに頼まないよ」

ポールの表情はいつも通り。“難しいことを頼んでいる”という

感じには見えない。ここまで彼が言うんだ。だつたらおれはやれるだろう。ポールは信頼に足る男。それは今までの経験からわかっていることだ。

「オーケーわかった、やるよ。でもほら、あれは何て言つたっけ……キヤットウオーク？ 特別な歩き方とかあるんだろう？」

「最近はおおげさな歩き方はあまりしないね。ただ無愛想に歩くのが主流になってきてる。きみ、得意だろ？」

「得意つて……からかうなよ……」

「ごめん。ちよつとはリラックスするかと思つて。あ、オリヴァー」
ポールは背の高い男に声をかけた。

「オリヴァー、彼にランウェイでの立ち振る舞いを教えてあげてくれるかな」

立ち振る舞い？ そらみる、やっぱりなんかあるんじゃないか。まったく何の因果でこんなことに。確かにさつきは『何か手伝おうか？』と言つたが、それは簡単な開場準備とか、もしくはジャマにならないようひっそりしてるとか。そういう形で役に立ちたかつた。オリヴァーに連れ出され、ステージの袖に立つ。自己紹介をしようとしたところ、「きみは臨時のモデルでデイン。さつき聞いたよ」と、こちらを見ずにクールにつぶやいた。氷の彫刻のような面差しのオリヴァー。彼こそがモデルだ。仏頂面がよく似合つてる。「いや、おれはプロのモデルじゃないんだ。それどころかまったくのシロウトで」

「うん、それも聞いた」 声音はぶつきらばう。笑顔はゼロ。スマイルを必要としない職業により、顔の筋肉が活動を停止したのかもしれない。

「ただステージを歩くだけじゃ駄目なんだな？」

「別に難しくはないよ。ちよつとしたコツみたいのがあるだけだから」

その歩き方はダンスと似ていた。イチ、ニ、サンで160度ターン。テンポは2ビート。肩甲骨は内側によせる。確かに難しくはな

いが、問題はステージでこれができるかということだ。

最後にオリヴァーは「ランウェイでは絶対に笑わないこと」と、彼が日常でも守っているであろうポイントを伝授してくれた。

客の前でスマイルを浮かべない。おれの職業とは真逆のルール。しかし今の自分には簡単なことだ。恐れと緊張で、表情筋のすべてが死んだ。

身内が死にでもしたような表情のおれに、タニタさんが明るく声をかける。

「ねえ、ディーン。ステージに立つのは素敵な体験よ。そんなにナースにならないで、エンジョイしてくれると嬉しいわ」

『エンジョイして』。この台詞、まるでローマンそっくりだ。くすりと思い出し笑いをするおれに、「ほら、笑った方がずっと素敵。ね、楽しんでちょうだい」と、嬉しそうに言う。

「笑ったらいけないんじゃない？」

「まあ、そうね。舞台の上でエヘラエヘラされるのは困るわね。だからといって心の中まで無表情でいるってのはつまらないじゃない？　せつかく素敵なお洋服を着てるんですもの。あらやだ、これって自画自賛かしら？」

ひとりでしゃべって、くると表情を変える。本当に彼はユニークだ。サムライの国にも“ローマン”はいた。どうやらこの国は独自の進化を遂げているらしい。

「今日のあなたは、あたしの“スペシャル・ゲストモデル”ってことで。ねえ、なんだか楽しくなってきたわ」

彼の言葉に、“ほらね”という顔で、おれを見るポール。いや、これは普通にアダ名だろ。“エグゼクティブ・メイクアップアーティスト”ってのとは違うと思う。

「それじゃ、あたしはお客さまのお相手をしてくるから。ポールは彼氏をキレイにしてあげて頂戴ね」

タニタさんは手をひらひら振って去っていった。もし彼がニューヨークに来ることがあれば、ぜひローマンと引き合わせたい。バッ

トマン対スーパーマンに匹敵する好カードだ。

ポールはおれを椅子に座らせ、首まわりにケープを巻いた。ハサミを手に「少しだけ髪を切ってもいいかな？」と聞く。

「ああ、構わない。ちよつとでも見栄えがするよう工夫してくれるのは大歓迎さ。なんたつてプロのモデル集団に混ざつて、肩身が狭いんだから」

「きみは他のモデルとくらべても見劣りしないよ。それになんたつて“スペシャル・ゲストモデル”なんだしね。自信を持っていと思うな」

「それは恋人の欲目だ」

「ぼくは仕事で来てるつて言つたろ？ これはプロの意見だよ。信じて」

どうやら本気でそう言つてくれているらしい。プロの目か恋人の欲目かはわからないが、少なくとも彼はおれを『他のモデルとくらべても見劣りしない』と思つている。それならば、そのように振る舞うまでだ。

『ああ、デーン。きみつてほんとに頼りになる（はあと）』というのは既に却下。じゃあこういうのはどうだ？ 『ああ、デーン。きみつてほんとにカッコイイ…（はあと）』

ライトを浴び、さつそうとランウェイを進む、スペシャル・ゲストモデル。ショーが終われば、待つてゐるのは、瞳に星を浮かべたエグゼクティブ・メイクアップアーティスト。

「やあ、ポール。おれはどうだつた？」

「エクセレント！ 完璧だ！ ああ、きみがぼくの彼氏であるなんて信じられない。とても誇らしい気分だよ……」（暗転）

よし、これだ。さつきはつい取り乱してしまつたが、この局面をうまく乗り切ることができれば、おれはポールの助けになるばかりか、ちよつとカッコイイところも見せてやれる。おれがイメージしていた展開通りとは言えないが、パートナーの助けになれるという点では同じこと。ポールはおれの窮地を救い、おれもまたしかり。

日本の想い出は完璧な形で幕を閉じるというわけだ。

服を着せられ、サイズを直され、またそれを脱がされ、ふたたび着せられているうち、段々その気になってきた。おれは他のモデルとくらべても見劣りしない？ おれは世界的に有名なデザイナーから、直々に指名されるほど素敵？ 窮地に遣わされた救世主？ そうかもしれない。きっとそうだ。そう思おう。でないといこの局面を乗り切れる自信が生まれてこないからな！

天は自ら助くる者を助く。これが何らかの運命だとしても、やはり努力は怠るべきではない。

ステージ脇でターンのおさらいをしていると、二人の男性が会話しながらやってきた。ひとりとは青年、もうひとりは中年。地道な努力を見られることを好まないタイプのおれは、なんとなく幕の陰に身を隠す。

「それはさっきも聞きました」と青年。

「だからロビンスさん、あなたからタニタさんに話してほしいんです」

長身の彼はモデルのようだが、さっきの楽屋では見なかった顔だ。「タニタさんは来客中だ。話などできない」

ロビンスと呼ばれた男は、太り気味の体型に熊ヒゲを生やしていた。容姿から判断するに、彼はモデルではないだろう。

「そもそも代役の件はタニタさんが決めたことだ。きみには残念だが、今回は無理だ」熊ヒゲがそう言うと、モデルは「ぼくは大丈夫です」とキツパリ答える。

「誰よりも立派に努めてみせます。さっき痛み止めを飲んだら楽になりましたから。お願いです。ショーに出させてください」

なるほど。会話の内容から察するに、彼は例の“来るはずだったモデル”。なんとかギリギリ間に合ったというわけか。せっかくや

ル気になったところで残念な気もするが、やっぱりこれがベストな形。彼はショーに出ることを切望してるし、おれはそうじゃないんだから。

「お願いします」と、モデル。

「もう服のサイズも変えた後だ」と、ロビンス。

「サイズぐらい何とかありませんか？」と、おれ。もちろん彼らに聞こえないように、こっそりとつぶやく。

ロビンスは厳しい顔で「きみはすぐにでも病院に行くべきだ」と言った。

「もう平気です。痛み止めを……」

「痛みの問題じゃない。衆人環視のなか、一万ワットのサンガン*で照らされるんだ。もしランウェイで倒れでもしたらどうする？」

(*SUNGUN＝照明器具)

一万ワットのサンガン？ 衆人環視のなかで、そんなのに撃たれるってのか？ なんだか怖くなってきた。

「ぼくはプロです。舞台で倒れたりなんかしません」

「すでに代役を決めてある」

「ええ、それは聞きました。なんでもシロウトだとか。そんなの無理に決まっています」

おい、そのシロウトはここにいるぞ。確かにおれは急場の代役だが、おまえの穴を埋めてやろうと頑張ってたんじゃないか。『無理に決まっています』など一括されるのはあんまり愉快なことじゃない。「そうまで言うなら」と、ロビンス。「タニタさんには一応、話を通しておく。ただ期待しない方がいい。きみであろうとわたしであろうと、交渉するのは難しいよ。彼は一度こうと決めたら、決定を覆すことはめったにないから」

ロビンスよ、交渉の幸運を祈る。ああ、これで肩の荷が降りた。外にタバコでも吸いに行こうかとしたところで、異変に気付いた。ロビンスが去った後、ひとり残された若者。彼はしゃがみ込んでじっとしている。なんだ？ まさかメソメソ泣いているってわけじゃ

ないだろうな？

そつと背後から近づくと、低いうめき声が聞こえた。彼は丸まって、両手で腹を押さえている。なんだこれは。痛み止めを飲んだんじゃないかったのか？

「あの、きみ……大丈夫か？」

声をかけると、若者はぱつと振り向いた。誰もいないと思つていたところに呼びかけられ、驚きに目を見開いている。

「びつくりさせてごめん。何か……気分でも悪いのかと思つて」

「別に」彼は短く言つて立ち上がる。その身長はおれとほぼ同じ。黒髪で長身。あごにわずかなヒゲがあり、近づき難い面がまえをしている。タニタさんが間違えたのも頷けなくはないが、明らかに異なっているのは年齢だ。彼はおれより五つ以上は若いだろう。

「きみは誰？」と若者。いちいち物言いがそつけない。オリヴァーも必要最低限の単語しか使用しなかつたし、これは業界のマナーなのか。このままではモデルという職種に先入観を抱きそうだ。

「おれはデーン。きみの代理で仕事を頼まれたんだ」

「そうか、きみが……」

“きみがドシロウトのデーンか”。彼は続く言葉を飲み込んだ。そして自分の名前は名乗らない。

「きみには悪いけど、今日の舞台に立つのは予定通りぼくだ。悪く思わないでくれ」

悪くなんて思つわけがない。それどころか間に合つてよかったと思つてる。よかったが……気になるのは、なぜ今、彼が脂汗をかいているかつてことだ。

「タニタさんがきみを起用したのは、きみが単にここに居合わせただけだからだよ。彼はそういう冗談が好きなんだ」

厳しい目つきでおれを見る。その顔色はグリーン。呼吸は浅く短い。そしてさつきまで床にうずくまつてうめいていた。これらを総合するだに……彼はひどく病氣だ。医者じゃなくともわかる。ステージになど立てるわけがない。

「きみは……やっぱり病院に行くべきだろ？」

「ぼくが最初にこの仕事をひきうけたんだ。ぼくはプロだ。最後までやり遂げる義務がある」

「いや、そういう話じゃなくて……」

「これはぼくの仕事だ。ぼくがどんなに努力してここまできたか。たまたま運良く居合わせたきみにわかるわけがない」

「もちろんそんなことわかるわけではない。彼の言う通りだ。しかしまったく別のことでおれにもわかることがある。“客を相手にするイベント”について、おれは彼よりも知っていることがあるのだ。」

「きみ、名前は？」

「ニール……」

誰かれ構わず名前を教えちゃいけないというルールに乗っ取ってでもいるのか、彼は渋々といった感じでファーストネームを自白した。

「ニール、きみの体調は最悪だ。そうだろう？」

睨むようにおれを見るニール。いや、“ように”じゃないな。おれはニールに睨まれている。

「きみは病院に行くべきだ」

「仕事が終わったら行くよ。ダンサーもオリンピック選手も、体調不良くらい構ってない。もちろんモデルもだ。こんなこと言ってもきみにはわからないだろうけど」

「きみがステージで倒れでもしたら、みんなに迷惑がかかるんだ」

「倒れたりなんか。死んでもするもんか」

「死んだら倒れる。だいたいの場合」

「はあ？ 何が言いたいのか？」

「たとえばきみがプロフェッショナルであっても、死んだら倒れるってことさ。フランク・シナトラだって、舞台上で死んだら間違いなく倒れる。“倒れること”ってのは、きみのコントロール下にあるものじゃない」

おれはニールに一步つめ寄った。彼が後ろに退かないので、おれ

たちの間には距離がなくなった。

「おれはモデルじゃない」

「わかってるよ」

「仕事では接客業をしてる。そこで第一に考えるのは、自分のことじゃないんだ。まず客のことを考え、次に企画全体のことを考える。自分がどうしたいかってのは、いちばん後だ。きみがやろうとしていることは、確実な結果を上げられるものか？ そうじゃないだろ。“リスクを犯してでも”という考えもあるが、それはきみが決めることじゃない。ニール、きみのしていることはプロとしての頑張りじゃないよ。ただのエゴだ」

ニールは黙っている。黙って汗をかいている。

「具合が悪いなら、しばらくそこに座って休んでいろ。そして少し落ち着いたら病院に行って検査を受けるんだ。きみはまだ若い。自分のキャリアについて考えるのはその後でも遅くないはずだ」

ニールは黙っている。おれも黙っている。互いの間に沈黙が流れた。当然反論してくるだろうと思ったが、予想に反し、彼は口を閉じたままだった。初対面の人間に説教され、面食らっているのかもしれない。それにしても英語が通じる相手で本当によかった。（ところでこの仕事、日本人はどこにいるんだろう？）

「あらっ、どーしたの？ 何か顔が変わったみたい」

おれの変化に真っ先に気付いたのはタニタさんだった。さすがは世界のアーティスト。仕草はゲイだが、サムライより聡い。

「ちょっとスイッチが入ったんです」

「さっきまではオフだったってわけね」

「今なら何でも着こなせる気がするな。ヒラヒラでもスケスケでも、どんと来いって感じで」

「意欲のあるところで悪いんだけどスケスケじゃないの、ごめんな

さい。でもその意気だね。顔はクールに、心はホットに、よ」

おれの顔がクールなのは役割に真剣だから。心がホットなのは信念に燃えているから。あれだけのタンカを切った後だ。今や完全に気合が入った。

おれだつてニールに同情する気持ちがないわけじゃない。こんな見ず知らずの男に、仕事を横取りされるんだ。彼が誇りを持ってやっている仕事。どうしても立ちたいと思っている舞台の代役だ。

これはもう“やりたい”とか“やりたくない”とかいうレベルの話じゃない。ポールにいい格好を見せるとか、おれがみつともなくないようにとか、そんなことはどうでもいい。さつき自分で言ったじゃないか。エゴは二の次。今できるベストを考え、それを実行する。ショーを見にきている客は、モデルの中にシロウトが混ざっているなど知る由もない。急場をしのご代役だとか、初舞台にビビってアタフタしてるとか。そんな裏の事情など、何の言い訳にもなりやしない。これはニールのためでもなく、ポールのためでもなく、タニタさんのためでもなく、ましてやおれ自身のためでもない。素晴らしい舞台を期待して、ここに来ている人々のために。今宵、おれは生まれて初めて、一万ワットのサンガンに照らされた。

長く続く拍手に応え、舞台ではモデルたちとデザイナーが客席に向かつておじぎをしている。おれはそこには混ざっておらず、楽屋のパイプ椅子にくずれ落ち、死んだ魚のようにぐったりとなっていた。

「おれ……変じゃなかったか？」

そつと肩に置かれた手に、目も開けず、そう訪ねる。

「大丈夫だよ」と、優しい手の持ち主。それはもちろんおれの恋人。「本当にそう思うか？」

「もちろん。今日初めてモデルになったとはとても思えないくらい」
「そう見えたか？ 本当に？」

「自分ではどう感じるの？」

「感じるも何も、さっぱり覚えてない。数分前のことだったのに。
健忘症かな？」

ポールはくすくすと笑い「素敵だったよ」と、おれの肩をそつとさする。

「本当、最高。エクセレント。きみがぼくの彼氏であるなんて信じられないくらい。とても誇らしい気分だな」

…………… 嘘くさい。彼の台詞はおれが予測した通りだが、何かどこかが想像と違っている。

「ねえ、ディーン。きみってほんとに頼りになるな」
運動会でビリの子を励ますような口調。

「きみはぼくたちの窮地を助けてくれた。なんたつてスペシャル・ゲストモデルだしね。ぼくにとつてもきみと一緒に仕事ができたこと、日本でのいい思い出になったよ」

わかった。おれが悪かった。だからもうやめてくれ。はつきり言っていたたまれない。ポール、きみも早く健忘症になってくれ。

「後でビデオをもらえるって」

「何が？」

「このショーの。帰ったらローマンに見せてあげたいな。彼はタニタブランドのファンだからね…………あれ？ ディーン？ どうしたの？」

かすかに残っていた生彩が、今、完璧に失われた。初のモデル体験は完全燃焼。完全燃焼の後、ただ灰になるのみ。灰は灰に、塵は塵に。“スペシャル・ゲストモデル”の銘は消失せり。スーパームodelでない普通のおれであることに、今は感謝の気持ちでいっぱいだ。

ニューヨークに戻ってすぐ、タニタさんからメールが届いた。それによると、あのととき脂汗を流していたモデル、ニールは急性盲腸炎だったとのこと。

「しかも破裂寸前だったって。あのままいたら大変なことになってたね」

ポールが見せてくれたメールには、ニールがタニタさんに伝えたという言葉 『キャリアのことは身体が治ってから考えることにします』と、書かれていた。

モデルの報酬がおれの口座に振り込まれ、その金額を見て思わず仰天。とっさに転職を考えるほどの数字がそこにはあった。おれはニールからこれだけのものを奪ったのか。そりゃあ、倒れる危険性を犯してでも舞台に立ちたいと思うはず。なんだか今になって、悪いことをしたような気になってきた。

その懸念を口にすると、ポールは「悪いことだなんてとんでもない」と、優しくフォローする。

「きみは何ひとつ間違ったことはしてないよ。ほんとにあれば素敵だったな……」

「ああ、それを言うのはやめてくれ。恥ずかしくて思い出したくもない」

「そっちじゃなくって」ポールは笑った。「きみがニールに言ったこと。立派だったよ。ほんとに素敵だと思った」

「……え？ どうしてそれを？」

するとポールは肩をすくめ、「見たんだ」と言う。「びつくりしたよ。きみを呼びに行ったら誰かと喧嘩してるんだもの」

「別に喧嘩してたわけじゃない」

「あ、そうか。ごめん。じゃ、あれは何？ 話し合い？」

「話し合いっていうか……おれが一方的に彼に説教しただけだ。今になって考えると、あれはあまりにも図々しかったな。おれはあそこの関係者でもなんでもないわけだし。まるで自分の部下に言うみ

たいにして、ニールを諭してしまった」

「でも結果的に丸くおさまった。でしょ？」

「まあな」

「きみの言ったことが正しいってわかったから、彼は反論できなかったんだよ」

結果的には丸くおさまった。結果よければすべてよし。そこに辿り着くまでに、いかなる苦難を受けようとも。たとえばそれは、一万ワットのスポットライトを浴びること。たとえばそれは、口論の末に恋人からの理解を得ること。

おれが最初に空想したのは『ああ、ディーン。きみってほんとに頼りになる（はあと）』というイメージで、その次が『ああ、ディーン。きみってほんとにカッコイイ…（はあと）』。どちらも想像通りにはいかず、むしろあのショーのことは、早くボールの記憶から抹消したいとすら思う始末。

おれの人生はいつも思うようにいったためしがなく、それでもどういうわけか、“結果的には”うまくいつている。

誰もが認める女好きのディーン。それがどういうわけか男友達と暮らすようになり、あまつさえ彼を恋人に選択。かつておれが想像していた未来は、今ここにあるものと同じであるとは言い難く、それでもおれはこの状態を愛していて、“想像を絶する”この結果には満足している。

「今回の旅行はぼくにとつてすごくいい思い出になったよ。きみにとつてもそうだといいけど……」

おれの髪を撫でる優しいタッチ。彼の手を取り、それにキスする。「もちろんおれも同じさ」と言っ

「いろいろなことがいい思い出になった。舞台の上でのことは覚えてないけどな」

「だからショーのビデオを見ようって言ってるのに」

「嫌だ。それだけは絶対に嫌だ」

「だって覚えてないって言うから」

「きみも忘れるんだ。いいか、おれが10カウントする間に、きみはショーのことも、そのビデオの存在も忘れる……じゅう、きゅう、はち、なな……」

4まで数えたところで、ポールはおれの唇をふさいだ。それは彼自身の唇を用いて。なにより有効な手段に、おれは抵抗を放棄する。我が家のキャビネットにはキャットショーの録画DVDがある。

未だ一度も上映されず、おそらくこれから封印されたままの想い出。いつかおれたちが年をとって、過去のこと恥ずかしくなくらい健忘症が進行した頃に、それは封切られる予定だ。

結果よければすべてよし。むしろこれ以上うまくいっている結果なんて、今のおれには想像もつかない。

End .

（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。

もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「エピソード12 : 父の面影」<http://ncode.syosetu.com/n0528e/>に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9805d/>

ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード11:スーパーモデル体験！？（Vo

2011年8月15日03時25分発行